

政治家の頭腦を悩ます最大問題である、まことにマッシュュー・アーノルドが曰ひしが如くに「人生十分の九は正義である」、正義を發見し、正義を實行す、人生十分の九は之にて盡きて居るのである。○聖書の貴き理由は茲に在るのである、それは特に正義の書であるからである、聖書は第一に神と人との義しき關係に就て教へる、第二に人と人との義しき關係に就て教へる、それ故に聖書は永久的に貴いのである、而して世界思想を支配する者は聖書である、華盛頓會議も亦聖書の教を國際的に實行せんが爲に開かれたに過ぎないのである、今より二千七百年前に豫言者イザヤの發せし言、即ち「劍を打かへて鋤となし、槍を打かへて鎌となし、戰鬪の事を復び習はざるべし」との言が今や其實現を見んとしつゝあるのである、故に聖書を知らずして世界は判らない、聖書を知るは個人として、國家として、人類として最も必要である、我等は聖書を學んで閑問題を學びつゝあるのではない、最も實際的の最大問題を研究しつゝあるのである。

○羅馬書第八章は聖書の最高峰である、故に其一言一句も忽せにする事は出來ない、其第一節に曰く「是故にイエスキリストに在る者は罪せらるゝ事なし」と、全章を紹介する辭として甚だ大切である、「是故」には前章末節を受けた辭として見る事は出來ない、さう見る場合には心にては神の法に服へども肉にては罪の法に服ふ者が罪せらるゝ事なしと云ふ事になる、勿論然かありやう筈はない、故に「是故」には前章六節を受けた者と見るが正當である、而して七章六節は五章一節以下の絮説の結論

であるが故に、「是故に」は五章以下七章までの議論の結果を受けて云ふ者と見るが當然である、即ち信仰に由て義とせられ、キリストの死と復活とに由て潔めらるゝが故に、「是故に」と云ふのである、希臘語の小辭 (καὶ) であるが、其解釋如何に由て信者の信仰上並に實踐道德上に大なる相違を生ずるに至るのである。

○「イエスキリスト」は改譯には原語の通りに「キリストイエス」と成つて居る、それが本當である、而してキリストイエスと云ふはイエスキリストと云ふと少しく違ふ、キリストイエスは復活し、昇天し、今は聖父の右に座して萬物の上に其大能を揮ひ給ふ榮光のイエスである、即ちキリストなるイエスである、しかも單に神なるキリストではない、神にして人なる即ちイエスなるキリストである、イエスキリストと云ふ場合には人なるイエスが高調せられ、キリストイエスと云ふ場合には神なるキリストが強唱せらる、而して信者が今仰ぎ頼む者は榮光の寶位に座し給ふキリストイエスである。

○「キリストイエスに在る者」クリスチャンの何たるかを示したる辭である、クリスチャンは單にキリストを信する者ではない、彼を崇め又拜む者ではない、「キリストに在る者」である、キリストの内自己を投込んだ者である、キリストと同體に成つた者である、我れ彼に在り彼れ我に在りと云ふ状態に於て在る者である、「人もし我に居り、我れ亦彼に居らば」とヨハネ傳十五章五節に云ふ其状態である、親密其極に達したる關係である、基督信者と云ふよりも更に更に深い意味のある名稱である。

る。

○「罪せらるゝ事なし」改譯には「罪に定めらるゝ事なし」とある、罪を言渡さるゝ事なし、又罪を罰せらるゝ事なし、罪と其結果とより全然釋放せらるゝとの意である、罪實並に刑罰より免かるとの事である、キリストに在る者には完全なる赦免があるとの事である。

○改譯に倣ひ「是故に」の次に「今」と云ふ辭を入れるの必要がある、神の恩恵を信じ、キリストの内に自己を投入し者は今や罪せらるゝの恐怖なしとの事である、「今」は不信時代の過去に對して云ふのである。

○「罪せらるゝ事なし」と云ふ、是れ何人に取りても大恩恵である、信仰の一面はたしかに罪の當然の結果たる刑罰の恐れよりの解脱である、此恐怖なくして福音の福音たる理由は判らない、然かも近代人に此恐怖がないのである、彼等は神は愛なりと稱へて、彼が罪を憎み、罪人の責任を問ひ、悔改めざる罪人を罰し給ふ事を信じないのである、近代人は神の愛を誤解して彼を恐れない、彼等は聖書に「活ける神の手に陥るは恐るべき事なり」と讀んで其恐ろしさを感じない（ヘブル書十章三一節）、彼等が福音の有難さを感じ得ない理由は茲に在る、彼等が又宗教的熱心を發し得ざる理由も茲に在る、パウロを始めとしてルーテルも、クロムウェルも、バンヤンも、深い信者と云ふ信者はすべて此恐怖を感じた、自身地獄に墮ちたる實驗のあるダンテが彼の『神曲』を著はし得たのである、而して

此實驗なき近代の宗教家と文學者とは、『神曲』の藝術的方面を解し得るに止まつて、其信仰的心髓は到底これを探り得ないのである。

第三十六講 約説

死より免かるゝ事

○もし聖書を寶の倉庫に譬ふべくば羅馬書、殊に其第八章は之を寶玉の匡に比ぶる事が出来る、其内に金剛石あり、黄玉あり、綠玉あり、青玉ありて、其孰れを以てするも富をなし貴きに達する事が出来る、其各節が眞理の珠玉である、其孰れを取るも以て長講演の題目となす事が出来る、第一節「キリストイエスに在る者は罪せらるゝ事なし」と云ふが如き、第六節の「肉の事を念ふは死なり云々」と云ふが如き、第十節「キリスト汝等に在らば體は罪に因りて死云々」と云ふが如き、孰れも信仰上の大眞理であつて、之を委しく説明するは容易の事でない、寶貨は積みて山をなす、其孰れよりして評價を始めて宜しきや其途に窮するのである。

○パウロの文體は……ヨハネ其他の聖書記者の文體も同様である……現代人のそれとは違ひ論理的でなくして累積的である、一個の眞理を順序的に敘述するのでなくして、一つの眞理の上に他の眞理を積重ねて連続的に感得せしむるのである、恰かも夏の雲を望むが如くであつて、疊々として重層を望むの觀を呈す、之を一節より十一節までに於て見るに贖罪の眞理、清潔の眞理、聖靈の眞理、復活の眞理が相重なりて提示せらるゝのである、パウロは神の使者として權威を以て殆んど威壓的に我等に臨むのである、而して我等は先づ其執れに接して之に應へん乎、其途に苦しむのである、彼の言辭は餘りに重く其意味は餘りに濃厚にして、其攝取と消化とに讀者は甚く困しめらるゝのである。

○斯かる場合に於て何人も同時に其全部を咀嚼し消化する事は出来ない、其一節一句丈で充分である、而して其一節を深く窮めて全篇を貫く中心眞理に達する事が出来る、恰かも地球の表面何れの地點より穴を穿つても之を四千哩の深さにまで掘撃すれば終に地球の中心に達すると同じである、試に第一節を其終極まで究むれば福音の中心的眞理に達する、第六節、第十節皆な同様である、必要なる事は我等各自がパウロ氣分になる事である、我等各自がパウロと共に心を福音の中心點に置くならば、彼の言辭がすべて我有となりて其意味は註解をまたずして明瞭になるのである。

○第一節を見るに其内に二個の大切なる眞理が示されてある、其第一は「キリストに在る者」と云ふ事、第二は「罪せらるゝ事なし」と云ふ事である、キリストに在るとは彼と同身同體となる事であ

る、我れ彼に在り彼れ我に在ると云ふ状態に入る事である、故に九節に於て「神の靈汝等に住まば」と云ふも、「キリスト汝等に在らば」と云ふも、又十一節に於て「イエスを離らしゝ者の靈汝等に住まば」と云ふも、其意味は「キリストに在る者」と云ふと異なる、信者はキリストに在る者であつて、同時に又キリストが其靈を以て其内に住み給ふ者である、「キリストに在る者」と云ふ言辭の内に聖靈内在の眞理の一面が明かに示されてあるのである。

○「罪せらるゝ事なし」と云ふが第一節の示す所の第二の福音的大眞理である、「罪せらるゝ事なし」とは救拯の消極的の半面である、然し救拯其物を示す言辭なるは明白である、而して其積極的の半面を云ふた者が第六節の「生」又「安」である、第十節の「靈魂は義に緣りて生きん」とある其事である、第十一節の「汝等が死ぬべき身體をも生すべし」とある其事である、其他後節に於て神の子と成る事、キリストと共に世嗣となる事も其内に含まれて在るのである、斯くして「罪せらるゝ事なし」と云ふは大なる廣き言辭である、神がキリストを以て下し給ひし恩恵の全部がその内に含まれてあるのである。

○如斯くに解して第一節を以て第八章全體の題目として見る事が出来る、残る三十八節は此一節の敷衍又は註解とも見る事が出来る、「キリストイエスに在る者は罪せらるゝ事なし」と云ふ、我れ信仰を以てキリストに在り、キリスト聖靈を以て我内に宿り給ひて我は義とせられ、淨められ、終に復活

して救拯を完成せらるると云ふのである。

○茲に一節以下四節までの意譯を紹介する。

以上に述べ來りし所に由れば、クリスチャン即ちキリストイエスに在る者は今や罪に定めらるゝと云ふ事あるなし、而して更らに尙ほ他の理由を述べて言はんには、キリストイエスに在る生命の靈の働らきは罪と死との働らきより我を解放したり、其理由如何となれば律法の無能なる所、即ち肉の故に弱き所を神は實行し給へり、即ち其獨子を罪の肉の形にて罪祭の犠牲として遣り、其肉に於て罪を罰し給へり、これ律法の義の我等クリスチャンに於て成就せられん爲なり。

○第二節は聖靈の聖化力を示したる言辭である、聖化力は聖靈のみでない、信仰其物が大なる聖化力である、キリストの御生涯も亦大なる聖潔の能力である、我等はキリストを仰瞻て、信仰的にも實行的に聖めらるゝのである、然し乍ら聖潔は最も徹底的に聖靈の降臨に由て實行せらるゝのである、キリストイエスに由る活かす靈が信者に臨んで彼の内に働く死と罪とが驅逐せらるゝのである、有名な蘇格蘭の説教師ドクトル・チャルマーが曰ひし通りである、Expulsive power of new affections (新しき愛情の驅逐力)と、聖き活かす神の靈が心に臨む時に死せる罪の靈は驅逐せられて、信者は後者の束縛より釋放せらるゝのである、茲に「法」とあるは「權能」と解すべきである、權能は法に必ず附隨する者である、此場合に於ては生命の靈の權能に由りて罪と其結果たる死との權能より釋

されたりと解して意味は明白になる、又釋さる。(現在)ではない、釋されたり(過去)である、パウロは過去に於て或る明確なる實驗として聖靈の降臨に由る罪念消滅の恩恵に與つたのである。

○第三節四節は難解の二節である、言辭は簡短であつて意味は深遠である、之を悉く解釋するに福音全部の説明が必要である、キリストの受肉、其受難、復活、昇天の意味を明かにして此兩節の意味が判明るのである、而して今茲に斯かる説明を爲すことは出来ない、又爲すの必要はない、然し斯かる説明を爲さずとも、其根本の意味を探るの途は在ると思ふ、基督教は罪を如何に觀る乎、其事がわかつて是等兩節の意味がわかると思ふ、有名なる英國の説教師ドクトル・ジョエットの言を藉りて言ふならば罪は eruption (爆發) であり、corruption (腐敗) であり、disruption (分裂) である、罪は惡の外に爆發した者である、然し乍ら其原因は内なる心の腐敗にあり、而して腐敗にも亦原因がある、それは分裂である、神に對する人の關係が分裂して茲に心の腐敗が始まつたのである、故に罪を去らんと欲せば腐敗を除かざるべからず、腐敗を除かんと欲せば神との分離(父子の關係の分裂)を正さざるべからず、罪の原因を茲に發見せずして、其刈除を講ずるも無益である、而して神が其子を罪の肉の形となして罪祭の犠牲として遣はし、其肉に於て罪を罰し給へると云ふは罪を其根本に於て絶たん爲であつたに相違ない、神の取り給ひし此途の説明は之を爲すに難くある、然し乍ら其目的の茲に在つた事、而して之に由て我等の罪が實際的に其根本に於て絶たると事は信者の實驗として疑ふ

の餘地がない、キリストの御生涯に由て神と人との關係が正され、茲に兩者の間に交通の道が開かれキリストを通うして生ける神の靈が死せる人に傳はり、其結果として人が罪と死とより免かるゝに至ると云ふのが基督教の根本的教義である、而して此教義を明白に且簡潔に傳へた者が羅馬書八章三節四節である、難いと云へば難くある、深いと云へば深くある、然し乍ら福音の眞理の明白なる記述として意味最も明瞭である、茲にパウロが記した言辭其儘が大眞理である、之を解し得ないのは、言辭が解し難いからではない、我等の心が罪に汚れて其明白なる意味を受取り得ないのである、聖靈に従ふ者の眼には一目瞭然たるべきである。

○人は神を離れて罪の状態に於て在つた、キリストは二者の間に入り、其分裂を癒し、神が人に臨み、人が神に詣るの道を開き給ふた、茲に於てか神の靈が人に通じて人は神の聖旨を行ひ得るに至つたのである。

第三十七講 約説

禁慾と靈化

○聖書の言は其儘にて眞理である、之に註解を附するの必要はない、註解を附して却て其意味を害ふの虞れがある、詩人ホキットマンが自分を歌ふた言に曰く

私は知る私の尊嚴なるを、然し私は自分を説明し 又は諒解して貰はうと思はない、思ふにこの根原の法則は解釋を絶することを。我は在るが儘に在る、それで充分である、誰も私を知つてくれなくも満足である、そして皆が又残らずの人が私を知つて呉れても同様に満足である。

此言は詩人に於てよりは寧ろ聖書の言に於て眞理である、聖書は靈魂の根原の法則に就て語る者であるから是は解釋に絶するのである、聖書は在るが儘に在る、人が誤解すればとて自分の爲には悲しまない、又強ひて自分を釋明し、世に諒解して貰はうとは思はない。

○「肉の事を念ふは死なり、靈の事を念ふは生命なり、平安なり……肉の事を念ふは神に乖る（敵する）事なり、……肉に居る者は神の心に適ふ（神を悦ばす）事能はず」と云ふ、（羅馬書八章六、七、八節）、是は聖書の言であつて其儘が大眞理である、之に説明を加ふるの必要はない、是は尊嚴にして犯すべからず、神の言として信受するまでである、而して今日諒解する事が出来ないならば、之を記憶に留めて、聖靈の働らきに由り我が實驗となりて現はるゝまで待つべきである、「肉の事を念ふは死なり」と言ふ、強い言である、然し乍ら明白なる深い眞理である、人生其七分は性慾であり、三分は食慾であると云ふ、即ち其全部が肉慾であると云ふのである、而して之に苦悶と恥辱と死と滅亡と

の伴ふは言はずして明かである、個人と社會と國家との注意を肉より靈に轉じて其處に生命と平安とがあるのである、「靈の事を念ふは生命なり平安なり」と、人生の偉大と云ふ事はすべて靈界に於て行はるゝのである、偉人とは靈の人、大國民とは靈的に偉大なる國民である、富豪は其有する富の故に偉大ならず、強國は其領土の廣きが故に偉大ならず、大宗教と、大思想と、大文學と、大美術とを有する者は、小なりと雖も大である、弱きと雖も強くある。

○聖書の言は在るが儘にて大眞理である、人は之に説明を加へてヨリ大なる眞理となす事は出来ない、純金は鍍金するに及ばない、太陽を照らすに足るの燈火はない、然れども我等は聖書の言の誤解又は濫用を防ぐ事が出来る、此事たる勿論聖語其物の爲には必要でない、然し乍ら聖語に接する人の爲に必要である、我等聖語に接して時に眩惑せらるゝ危険があり、又燬盡さるゝのおそれがある、茲に於てか聖書註解と謂はんよりは寧ろ聖書辯證と稱すべき者の必要が起るのである、神學の一科として辯證學あるは是が爲である。

○「肉の事を念ふは死なり」と云ひ、「神に乖ふ」事なりと云ひ、「肉に居る者は神の心に適ふ事能はず」と云ふ、もし此言を文字通りに解するならば容易ならぬ事になる、即ち生きて居てはならぬと云ふ事になる、肉の事を念ふは罪、其結果は死、神に逆ふ事、神に悦ばれざる事であると云ふならば信者は肉を殺し之に死すべく努めねばならぬ、而して同じ事を教ふるやうに見える聖書の言は他にも許

多ある、キリストの聖言としては「我れ汝等に告げん(肉の)生命の爲に何を食らひ何を飲みまた身體の爲に何を衣んとて憂慮ふ(注意を配る)勿れ云々」と(マタイ傳第六章廿五節)又「もし我に従はんと欲する者は己を棄て其十字架を負ひて我に従へ、そは其生命を保全せんとする者は之を失ひ、我が爲に其生命を失ふ者は之を得べければ也」と(同十六章廿四、廿五節)、又イエスが獨身生活を奨励するが如くに見ゆる言としては「それ母の腹より生れつきなる寺人あり、又人にせられたる寺人あり、又天國の爲に自からなれる寺人あり」と云ふが如き(同十九章十二節)、其他枚擧するにいとまがない、殊に「汝等の地に在る肢體を殺すべし」とのパウロの言の如きは最も明白に肉の生命其物を拒否するが如くに見える。(コロサイ書第三章五節)。

○然れば基督教は禁慾主義である乎、又更に進んで遁世主義又は殺我主義である乎、多くの人はさうであると曰ふ、而して彼等は彼等の主張を證明するにあつて聖書より許多の言を引用する事が出来る、而して斯く唱ふる人に二種ある、第一種は基督教に反對する人であつて、第二種は禁慾主義を實行する人である。第一種の人曰ふ、基督教は明白に禁慾主義である、故に到底行ふべからざる者である、天然の法則を無視し、存在の根本を毀つ者である、故に信すべからず、斥くべしと、斯く言ひて基督教を去つた者が多くある、よし公然と斯く唱へざるも基督教を如斯くに解釋して其嚴格なる要求に堪へずして之を去つた者は尠くない。

○第二種の人は基督教を禁慾主義なりと解して其通りに實行した人である、斯る人のあつた事、又今ある事に就て詳しく述ぶる必要はない、羅馬天主教會に於て教職はすべて獨身者なる事、基督教會に於て早くより禁慾主義の起りし事、Encratiteの一派ありて結婚と飲酒を嚴禁せし事、有名なる聖シメオンありて砂漠に高き柱を立て、其上に座して風雨に身を曝しながら三十年の長き生涯を送りし事、現今も尙ほ享樂主義の盛なる米國に於てすらシェーカーの一派ありて中古時代の禁慾主義の下に共產生活を營む事、是れ皆な周知の事實であつて茲に之を反復す必要はない、而して基督教に限らず宗教と云ふ宗教にすべて此傾向ある事、佛教に於ても、回教に於ても、禁慾主義の教派のある事、是れ亦知れ互りたる事實である、瑞典國の有名なる探險家スベン・ヘチンが西藏國に於て實見せし極端の殺慾的生活、我國の宗教歴史に於ては法然の弟子として武藏の國の住人津戸の三郎爲守の有名な自害往生があつた事（法然上人行狀畫圖第二十八を見よ）、其他燒身往生、入水往生、斷食往生等の例があつた事……禁慾主義は基督教に限らない、熱心なる宗教的信仰の在つた所には必ず禁慾主義があつた。

○基督教は果して禁慾主義である乎、然らずである、或る方面より見てさう見ゆるなれども、其根本的精神を究めて見て決してさうでない事がさわる、キリストは常に御自身を新郎に譬へて曰ひ給ふた、ヨハネの弟子彼に來りて我等とパリサイの人は屢々斷食するに汝の弟子の斷食せざるは何故ぞと問ひしに答へて彼は言ひ給ふた「新郎の友その新郎と偕に居る間は哀む事を得んや」と（マタイ傳九章十四節以下）、又曰ひ給ふた。「人の子來りて食ふ事をし飲む事を爲す」と（同十一章十九節）、キリストは新郎であり、信者は新婦であり、待望まるゝ救ひは羔の結婚であると教ふる基督教が禁慾主義の宗教でありやう筈がない、故にパウロが晩年に至り彼の言の誤解せられて、彼の弟子の内に禁慾主義の兆候を發見せしや、彼は痛烈に之を非難攻撃し、彼等の之に惑はされざるやうに誡めた、曰く

汝等もしキリストと共に死にて此の世の小學を離れしなれば何ぞ尙ほ世に生ける者の如く人の誠令と教とに循ひて「捫るな、味ふな、觸るな」と云ふ規の下に在るか、是等の誠令は……智慧ある如く見ゆれど實は肉慾の放縱を防ぐ力なし。（コロサイ書二章廿節以下）。

と、彼は又強剛に結婚を禁ずるの異端を責めて曰ふた、

聖靈明らかに、或人の後の日に及びて惑の靈と惡鬼の教とに心を寄せて、信仰より離れんことを言ひ給ふ……彼等は良心を燒金にて燒れ、婚姻するを禁じ、食を斷つ事を命ず、然れども食は神の造り給へる物にして、信じ且つ眞理を知る者の感謝して受く可きものなり、神の造り給へる物は皆善し、感謝して受くる時は棄つべき物なし、そは神の言と祈とによりて潔めらるるなり（テモテ前書四章一節以下）。

○基督教は禁慾主義に非ず、勿論其反對に放縱主義に非ず、然り死せる主義に非ず、活ける生命であ

る、肉の生命に代ふるに靈の生命を以てする者である、肉に居らず、其支配を受けず、之をして自己が上に王たらしめざる教である、而して肉を殺すに律法の誠命を以てせず、靈の權能を以てする、故に曰ふ「もし靈に由り身體の行爲を減さば生くべし」と(十三節)、患難苦行してはならない、「靈に由りて」である。

○此の途たる決して曖昧不徹底なるものではない、最も能く常識に適ひ、有效的にして永續する途である、常に信仰に由りてイエスを仰ぎ瞻て、其報賞として聖靈を賜はり、其指導に従つて歩む、如斯くにして肉は適宜に支配せられ、一方には禁慾に至らず、他方には放縱に流れない、神は我等が肉に宿る間は世の所謂「特別に潔き事」を要求し給はない、クリスチャンにも亦美はしき自然の途がある、我等は人の誠命と教とに従ひ「特別に潔き」を稱して信仰の奥義に達せりと稱すべきでない、聖靈の働らきを信じて満足すべきである。

○而して此途を踐みて多くの清き生涯が營まれた、禁慾主義の行はるゝ所は決して清き所でない、ルートルは結婚を斷行して歐洲教職階級の道徳を數段高めた、最も美はしき家庭生活は清教徒に由て營まれた、新英洲文學は最も健全なる文學である、ホキッチャーの「雪籠」、ロングフェローのエヴァンジェリン、其他ブライヤント、ローエル等の作は皆な清教徒の自由にして貞淑なる空氣を呼吸する者である、高貴にして清潔なる思想と實行とは「靈に由りて身體の行爲を減す」に由て生るゝものである。

ある。

○慾の制限の程度如何、自己を義とせざる範圍に於て行ふべし、喜んで正當と思ふ程度に於て施すべし、自己に奉ずるにも亦此法則に循ふべし、但し靈の量に増減あるを忘るべからず、神は其子の祈禱に應じて靈を賜ふ、多く求むる者に多く賜ひ、少く求むる者に少く賜ふ、「神は之に靈を賜ひて限量なければ也」とある(ヨハネ傳三章卅四節)、而して慾の制限の程度は賜はる靈の多寡に由て異なる、今日喜んで一圓を獻じ得る者は明日は同様に十圓を獻じ得るに至る、喫煙、飲酒、觀劇の如き之を罪惡と稱する事は出来ない、然し乍らもし豊かにキリストの靈の宿る所とならん乎、自から努むる事なくして、其の趣味を絶つに至る、ペテロ曰く「益々我等の主なるイエスキリストの恩寵に進め」と(ペテロ後書三章十八節)、而して恩寵に進めば進む程肉の慾は尠くなる、是が本當の減慾法である、何事を爲すにも聖靈の指導に従ふ、聖靈を離れて律法と規則と鞭撻の下に行ひて、行爲に無理が生じて神をも人をも悦ばす事が出来ない、使徒等曰く「聖靈と我等とは左の事を可とせり」と(行傳十五章廿八節)、道はここに在りである。

附言 肉とは何ぞや

○肉と云ひ、身體と云ひ、肢體と云ひ、同じ事を云ふのである、其肉と云ふは何である乎、其事を知るは聖書研究上最も肝要である。

○道徳的に見たる肉とは肉慾であるとは何人も思ふ所である、食慾、性慾、其他すべて生きんと欲する慾、それが肉慾即ち肉であるとは何人も氣の附く所である、而して此見方たる大體に於て誤謬なきは言はずして明かである。

○乍然、肉慾即ち肉なりと云ひて肉を罪と同視する事は出来ない、食ふ事、生む事は決して罪ではない、生命は神より出し者であつて、之を維持し又繼續する事が罪である筈はない、故に「肉の事を念ふは死なり、神に垂る事なり……肉に居る者は神に適ふ事能はず」と云ひ（羅馬書八章六一―八節）、「身體の行爲を滅さば生くべし」と云ひ（同十三節）、「汝等の地に在る肢體を殺すべし」と云ひて（コロサイ書三章五節）、肉と共に肉慾を殺すべしと云ふ事でない事は明である、そはもしさうであるならば、神が萬物を造り之を人に賜ひて、「生めよ繁殖よ地に満盈よ……全地の面にある諸の草と諸の樹とを汝等と共に與ふ、之は汝等の糧たるべし」との神の言が無効に歸するからである、生命が惡事でありやう筈がない、肉の生命も亦然りである、「神其造り給へる諸の物を視たまひけるに甚だ善かりき」とある、然り「善かりき」である、惡しくありやう筈がない（創世紀一章廿八節以下を見よ）。

○然らば神に垂る者、殺すべき者、肉と稱し退治すべき者は何である乎、それは肉其物ではなくして

肉が靈化せしもの、肉の主たるべき靈が其奴隸となりしものそれが即ち肉である、憎むべき殺すべき者は此意味に於ての肉である、肉化する靈、或ひは肉體的靈、それが肉である、故に肉と稱して解剖學上又は生理學上の肉ではない、道徳上又は精神上の肉である、神に反きたる靈が節制なき肉の慾として現はるゝが故に之を短縮して肉と稱するのである、「肉」は靈である、其事を忘れてはならない。

○其事を最も善く證明する者はガラテヤ書五章十九、二十、二十一節である、曰く

それ肉の行爲は顯著なり、即ち苟合、汚穢、好色、偶像に事ふる事、巫術、仇恨、争鬭、妬忌、忿怒、分争、結黨、異端、娼嫉、兇殺、醉酒、放蕩等

と、以上は何れも誤れる靈が肉に顯るゝ行爲であつて肉其物の行爲ではない、殊に妬忌、分争、結黨、異端、娼嫉等に至ては純然たる靈的行爲である、而してこれ神に垂る者、滅すべき者、殺すべき者であるは言はずして明かである、又同じ事を證明する聖語としてコロサイ書三章五節がある、曰く是故に汝等の地にある肢體即ち奸淫、汚穢、邪情、惡慾及び貪婪を殺すべし、貪婪は即ち偶像崇拜也

と、此場合に於て殺すべき者は、肢體則ち肉體ではない、奸淫、邪情、貪婪等の惡念である、正當なる肉の要求ではなくして、不正なる肉慾の濫用である、ヘブル書十三章四節は此事に關する善き註解である。

○茲に於てか肉の何たる乎は明かである、肉は食ふ事ではない、結婚する事ではない、肉の生命を維持し、其正當の發達を計る事ではない、所謂「肉」は自己を中心として萬事萬物を私用せんとする事である、故に憎む事、嫉む事、竊む事、諛ふ事、他人の名譽を害ふ事、是れ皆な肉である、此意味に於て罪は凡て肉である、多くの場合に於て、肉とは何の關係もなきやうに見ゆる罪も亦明白なる肉である。

○肉と云へば普通に食慾性慾に限られて居るやうに思はれてゐる、宴樂、醉酒、奸淫、好色と云へば肉の行爲を盡して居るやうに思はれてゐる。然れども争鬭も肉であれば、嫉妬も肉である(羅馬書十三章十三節を見よ)、而して最も憎むべき肉は靈化されたる肉である、税吏と娼妓を肉の人の模範と見るは淺い見方である、肉の人の模範は寧ろ學者とパリサイの人である、神學博士と教會信者である、故にイエスは是等の教會者に告げて曰ひ給ふたのである、曰く「誠に汝等に告げん税吏及び娼妓は汝等より先きに神の國に入るべし」と、(マタイ傳廿一章卅一節)、マタイは一度利欲の爲に國を賣り異邦羅馬の官吏となりて己が私腹を肥せしと雖もキリストに召されて悔改めて其使徒となる事が出來た、マグダラのマリヤは貞操を賣りて汚穢の淵に沈みしと雖も、主に救はれて其聖き婢となる事が出來た、彼等何れも肉の人であつた、乍然、主の御眼より見て比較的に軽い罪人であつた、而して學者とパリサイの人とは税吏と娼妓よりも遙に重い罪人、遙に悪い肉の人であつた、彼等或は酒を飲まず淫に耽ら

ざる點に於て靈の人として世に迎へられたかも知れない、乍然彼等は其内心に於て純然たる肉の人であつた、彼等は「徧く水陸を歴巡り一人をも己が宗旨に引入れんとして」充分に彼等の肉慾を發揮したのである(マタイ傳廿三章十五節)、先づ除くべきはパリサイの麴酵である、是はまことに肉素と稱すべき者である、宗教的嫉妬心 Odium Theologicum (神學者の惡意)、是が墮落せる肉の精である、何よりも惡むべき者、嫌ふべき者は是である、肉は特にパリサイの麴酵である。

第三十八講 約説

神の子と其光榮

○「凡そ神の靈に導かるゝ者は是れ即ち神の子なり」と云ふ(十四節)、如何にして神の子たるを得ん乎、是れ先決問題である、此事を明に示す者はヨハネ傳一章十二節である、曰く「彼を接け、其名を信ぜし者には權を賜ひて神の子と爲せり」と、神の獨子なるイエスを迎へ、彼をすべての人を照す眞の

光（同九節）、即ち彼が自己に就て證し給へる其聖言の儘に信する者には、神は其信仰に應じて權能を賜ひて神の子と爲せりと云ふ、即ち先づ信じ、信仰に應じて權能^{||}神の靈^{||}聖靈を賜へられ、而して神の子と成るのである、然れども神の子と成つて了つたのではない、神の獨子に連りて彼に在りて神の子と成つたのである、人は信仰を以てイエスと連る間丈け神の子であるのである、一朝其連結が絶たる、時には復び元の不信者に成るのである、「我は眞の葡萄樹、汝等は其枝なり、人もし我に居り、我れ亦彼に居らば多の實を結ぶべし、そは汝等もし我を離る、時は何事をも行し能はざれば也」とイエスが言ひ給ひしが如くである（同十五章五節）、子と成るとは子に連なる事である、幹の枝と成る事である、而して幹に充實する樹液を受けて同體となりて成長する事である、人が信仰を以て神の子イエスと連なる時に、イエスに充實する神の靈は彼に傳はりて彼も亦イエスが在るが如くに神の子と成るのである、此心を以て羅馬書八章十四節以下を讀みて其意味は明瞭になる。

○神は三位である、父と子と聖靈である、而して人の救拯は三位の神の共同事業である、其事が明白に此章に於て示されてある、信者の靈に三位の神の靈が宿り給ふのである、第十一節に「イエスを死より甦らしゝ者の靈」とあるは父なる神の靈を指して云ふのである、「キリストの靈」と云ふ、「子たる者の靈」と云ふは子なる神の靈である、而して聖靈、聖靈、聖靈と繰返して云ふは聖靈の神を指して云ふのである、斯くして三位の神の靈が信者の靈に宿りて其救拯を行ひ給ふのである、ヨハネ傳十四

章廿三節に「イエス曰ひけるは、もし人我を愛せば我言を守らん……我等臨りて彼と偕に住むべし」とあるは此事を云うたのであらう、イエス御一人（我）ではない、父と子と聖靈と（我等）が信者の靈に永久に宿る（住む）べしとの事である、事は神性の奧義に關し人の理知を以て説明する事は出來ない、然し信者の靈的實驗に照し合はして了解する事の出來ない事ではない、神は總がかりとなりて人を救ひ給ふのである、父は上より、子は側より、聖靈は下より信者を助け給ふのである、神は唯一なりと云ひて、單一の神が救ひ給ふと云ふよりは遙に深い、且つ情の籠りたる救拯の方法である。

（第九節並に第十四節に於て「神の靈」とあるは三位の神の靈全體とも、或は父なる神の靈とも解する事が出来る、然し後者即ち父なる神の靈と解する方が全章の意味をさらに明瞭ならしむると思ふ）。

○第十四節以下三節を左の如くに解釋して意味の一層明瞭になるを見る。

凡そ父なる神の靈に導かるる者は即ち神の子なり。汝等が受けしは奴隸たる者の靈即ち復たび懼るゝ靈に非ず、子なる神の靈を受けて、子とせられて、我等はアバ父よと呼ぶなり。

聖靈自ら我等の靈とともに我等が神の子たるを證す。

ヨハネ第一書五章八節に「證をなす者は三なり、即ち靈と水と血となり、其歸する所は一なり」とある、靈は勿論聖靈である、而して血は勿論子なる神が流し給へる贖罪の血である、而して水を父なる神が注ぎ給ふ聖靈と解して、此一節を以て以上三節の約説と見る事が出来る。

○子に嗣業なかるべからず、神の子の嗣業は改造されたる宇宙である、改造されたる靈を宿すに改造されたる身體を以てして改造されたる宇宙を賜はる、神の子の特權と其榮光とは茲に在る、「己の子を惜まずして我等すべての爲に之を附せる者はなか之に併て萬物をも我等に賜はざらん乎」とある(三十二節)、神は己が子に與へんとて萬物即ち宇宙を造り給ふたのである。

○光榮は至大である、然れども光榮に苦難が伴ふ、キリストと同體になりて彼と榮辱を頌たざるを得ない、苦難は光榮の影である、レムブランドの繪畫に於けるが如くに基督者の生涯に於て光明の強き丈けそれだけ暗黒は濃くある、故に信者の光榮は苦難を離れて説く事が出来ない、然り、信者は己に臨む光榮の大なるを知るが故に却て苦難を喜ぶのである、「患難にも欣喜をなせり」とパウロは言ふ(五章三節)、「兄弟よもし汝等様々の試誘(患難)に遇はゞ之を喜ぶべき事とすべし」と使徒ヤコブは言ふた(ヤコブ書一章二節)、「今暫らく様々の艱難に遇ふて憂へざるを得ずと雖も却て喜びをなせり」と使徒ペテロは言ふた(ペテロ前書一章六節)、敢へて艱難を訴へて同情を得んとするのではない、艱難を光榮の一面と見て却て之を誇るのである、基督者はキリストである、キリストに艱難があつた、之に類する艱難が信者にも臨まねばならぬ、而して信者が感ずる艱難は浅い肉體の艱難ではない、廣い宇宙的の艱難と深い靈的の艱難である、宇宙は基督者と共に苦しみ、聖靈も亦彼とともに慨歎するのである。

第三十九講 約説

天然の呻きと其救ひ

○パウロに二つのものが缺けて居つたと言はれる、其一つは美術を見るの眼で、其他の者は天然を見るの眼であるとの事である、彼は希臘の雅典に往いて其驚くべき夥多の美術に接して、少しも興味を喚起されなかつた、彼は唯之に人類墮落の現はれなる偶像崇拜の罪惡を見るに過ぎなかつた事は使徒行傳第十七章に詳かである、美術家の立場より見てパウロは無趣味なる不風流なる人である。

○パウロに亦天然を見るの眼がなかつた、彼は幾回か地中海を渡り、タウラス山を横斷してアナトリヤ高原(今の小亞細亞)を踏破せしと雖も、曾て一回も其天然美に關する讚美の辭を洩らした事がない、彼にアルプス、ブライアントの天然觀なきのみならず、主イエスの空の鳥と野の百合花を愛する愛さへ無かつたやうである、パウロは美術的に無能であつて天然的に貧弱であつたやうに見える。

○乍併、美術の事は別として天然の事に關してパウロは決して無能でなかつた、彼にも亦確實なる天

然觀があつた、之を傳ふるのが羅馬書八章十九節—廿二節である、パウロの天然觀は聖書記者のそれである、殊に豫言者イザヤのそれである、而して其天然觀たるや希臘哲學の流を汲める近代人のそれよりも遙に深い者であつた、イザヤもパウロも其眼を天然の表面には注がなかつた、深く其心に入つて其呻吟の聲を聞き、其希望の歌を歌つた、彼等は言ふた、人と天然とは同一體である、二者榮辱を共にし、人の呪はれし時に地も呪はれ、人の崇めらるゝ時に地も崇めらるゝ、故に人の勞苦は地も亦之を頌ち、人の歡喜に地も亦躍ると、エホバはアダムに告げて言ひ給ふた「汝、我が命じて食ふべからずと言ひたる樹の果を食ひしに因りて土(地)は汝のために詛はる」と(創世記三章十七節)、即ち地は人と運命を共にせしめられたのである、人は今や神を離れて罪の内在する、之と共に呪詛は地に加へられて萬物即ち受造物は呪はれし状態に於て在る、「受造物の虚空に歸せらるゝ」と云ふは此状態を言ふのである、人は神を離れて其爲す所悉く虚空(失敗)に歸するが如くに、地と地上の萬物も亦其受造の目的に達する能はずして、失望悲歎の聲を揚げつゝあると言ふ。

○人は天然の美を語る、然れども美は僅に其表面に止まる、一步其裏面に入れば天然は美に非ずして醜である、調和に非ずして混亂である、平和に非ずして戦争である、夏の野山に百花咲き競ふの状は美しくけれども、叢中如何なる殺伐、如何なる敗壞が演ぜられつゝある乎を知るならば、詩人の心は恐怖に戰慄へて讚美の歌は絶えるであらう、蛇は蛙を呑まんとし、蛙は蟲を食はんとし、蟲は相互を

殺さんとす、其蛇を狙ふ鷲がある、其鷲を狙ふ他の鳥がある、鷲の聲美はしと雖も、蛇は其巢に侵入して其卵を呑まんとし、鷹は其雛と親鳥とを窺ひて巢中の團聚を毀たんとす、伯勞の残酷なる、梟の陰險なる、杜鵑の狡猾なる、鳥類の常性を研究して見て、春の森、夏の林の決してエデンの園でない事が判明する、水中に於ても同むである、池に數尾の鯉魚が居れば他の魚類は腹部に穴を穿たれ血を吸はれて斃れて其跡を絶つに至る、鱒や飛魚や青串魚は鯨や海豚の餌食となりて失するに對し、鯨や海豚には又之を攻撃する逆又ありて彼等のを恐るや甚だし、猫が鼠を弄ぶの状、鷓鴣が鶏を襲ふの目的、無情を極め、殘忍を極む、花咲く櫻は美しくあれども、其若葉を食ふ蟲は見るさへ恐ろしく、松食ふ蟲、稻を枯らす黴菌數ふるに違がない、まことに耳を地につけて聞けば天然の呻吟の聲が聞える、曰く「我は痛む、我は苦しむ、人の子よ、早く救はれて、汝と共に我を救へよ、我は敗壞の奴隷たるに堪へず、汝と共に神の子たちの榮なる自由に入らんことを願ふ」と、天然は人と共に呪はれ、彼と共に縛られて、共に解放を叫びつゝある。

○斯くて人類の救ひは萬物の救ひと共に行はる、イザヤ書第十一章に於ける豫言者イザヤの言は完全き救ひに就て述ぶる者である。曰く

エツサイの株より一つの芽出で、其根より一つの枝生て實を結ばん、其上にエホバの靈止まらん、……彼はエホバを畏るるを以て歡樂とし、又目見る所に由りて審判を爲さず、耳聞く所に由りて

斷定を爲さず、正義をもて貧者を審判き、公平をもて國內の卑しき者の爲に斷定をなし、……正義は其腰の帶となり、忠信は其身の帶とならん、狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に臥し、犢雄獅子肥たる家畜と共に居りて小さき童子に導かれ、牝牛と熊とは食物を共にし、熊の子と共に臥し、獅子は牛の如くに藪を食ひ、乳兒は毒蛇の洞に戯ふれ、乳ばなれの兒は手を蝮の穴に入れん、斯て我が聖山の何處にても害ふ事なく傷る事なからん、そは水の海を覆へる如くエホバを知るの知識地に充つべければなり。

「斯くて我が聖山の何處にても害ふ事なく傷る事なからん」と、是が完全なる平和であつて完全なる救ひである。使徒行傳三章廿一節に所謂「萬物の復興」とは此事である。

第四十講・約説

三つの呻き

○「萬の受造物は今に至るまで共に歎き共に勞苦むことあるを我等は知る」とある（羅馬書八章廿二節）、「歎く」とは「呻く」又は「唸る」の意である、「勞苦む」とは「産の劬勞に在る」との意である、宇宙萬物は今や呻きつゝ産の劬勞に於て在るとのことである、大なる母宇宙は完全なる宇宙を産出して完全なる救拯を施されたる神の子達を迎へんと、今や呻き苦しみつゝあると云ふ、實に雄大な思想である、虚空に渦を卷いて新宇宙を造らんとしつゝある星雲、地獄の釜の如くに溶岩を以て沸騰する噴火口、肉食獸の襲撃に遭ふて悲鳴を擧げて呻く鹿と山羊、何れも宇宙の呻きならざるはない、然れども希望なき無益の勞苦ではない、希望に満つる産の劬勞である、其處に聖書の天然觀の美はしきところがある。

○宇宙の歎き即ち呻きがある、之に應じて信者の呻きがある、聖靈の初めて結べる實を有る我等基督者も亦己が衷に歎きて（呻きて）子と成らん事即ち我等の身體の救はれんことを俟つ（廿三節）、宇宙の呻きに應じて信者の呻きがある、呻きに應ずる呻きである、而して信者の呻きは其身體の救はれんが爲の呻きである、其靈魂は既に救はれた、未だ救はれざるは其身體である、而して身體が救はれずして靈魂は完全に救はれないのである、恰も妻が救はれずして夫は完全に救はれないと同然である、故に基督者は其身體の救はれん事を欲ひ之を望みて呻くのである、「噫我れ困苦る人なる哉此死の體より我を救はん者は誰ぞや」と云ひて歎き、「我に死ざる榮光の體を賜ふ者は誰ぞや」と云ひて呻く

のである、しかもこれ亦希望なき無益の勞苦でない、宇宙の勞苦と同じく希望ある産の劬勞である、神は既にキリストの身體の復活に由て彼を信する者の身體の救ひを保證し給ふたのである。

○更に尙ほ一つの呻きがある、それは聖靈の呻きである、「聖靈も亦我等の荏弱を助く、我等は祈るべき所を知らざれども、聖靈自から言ひ難きの慨歎を以て我等の爲に祈る」とある(廿六節)、「慨歎」は前の場合に於けるが如く「呻き」である、宇宙は呻き、信者は呻き、聖靈も亦呻くと云ふ、實に著しき言葉である。

○抑々呻きとは何ぞ、呻きは言ひ盡されぬ感情の發表である、「アー」と云ふが如き、「ウーン」と云ふが如き、「オー」と云ふが如き、「アラス」と云ふが如き、文法に所謂間投詞又は感嘆詞を以て言表さるゝ事柄である、マタイ傳廿三章にあるキリストが學者とパリサイの人を責め給ひし時に使はれし言葉は此種の言葉であつた、即ち呻きであつた、「噫禍なる哉」と譯せられしは單に「ウーアイ」と云ふ間投詞であつた、「ウーアイ學者よパリサイよ」と彼は言ひ給ふたのである、「言語に絶したる汝等よ」と云ふと同じである、而して人生最も深き者は言葉ではなくして呻きである、死の苦痛、産の歡喜、何れも言葉以上である、我等は「アー」と云ひ、「オー」と叫びて我等最深の情を言ひ露はすのである、パウロは「その言盡されぬ神の賜物に因りて我れ神に感謝する也」と曰ひて恩恵も感謝も言葉に絶せりと曰ふたのである(コリント後書九章十五節)、實に沈黙は最大の雄辯であると云ふが、多

くの場合に於て呻き又は唸りは言葉以上の言葉、美文以上の美文である、而して宇宙は呻き、信者は呻き、聖靈も亦呻くと曰ひてパウロはここに言盡されぬ深事を述べて居るのである。

○「聖靈自から言難きの呻きを以て我等の爲に祈る」と云ふ、「祈る」は「執成す」である、深い實驗の言葉である、我が祈禱は低い浅い祈禱である、人は自分で自分の事を知る事が出来ない、茲に於てか聖靈御自身が人に代て祈り給ふと云ふ、而かも信者の外に在ては無い、内に在りて、彼の靈と共に在りて、彼と同體同靈となりて彼に代て祈ると云ふ、其場合に於て祈禱は言葉でない、呻きである、アー又はオーの連続である、語るには餘り深くある、イエスのゲッセマネの園に於ける祈禱は斯かる祈禱であつたに相違ない、言葉は有ても短い、血の汗は流るゝ、「父よ聖意に任せ給へ」と、ヘブライ書の記者が此状態を記して「彼れ肉體に在りし時哀み哭びて涙を流して祈れり」と言ひしは、まことに其通りである。

○熱信なる母の祈禱の伴ふ子供は安全であると云ふが、信者には神御自身即ち聖靈の祈禱が伴ふのである、而して信者の祈禱の聽かれない事はあるが、聖靈の祈禱の聽かれない事は斷じてない、「人の心を察たまふ者は聖靈の意を知る、そは神の心に遵ひて聖徒の爲に祈れば也」とある(廿七節)、眞の祈禱は豫言である、是れ必ず成就さるべき者である、信者は聖靈に由りて事實となつて現るべき事を祈求として豫め神に求むるのである、三つの呻きは三つの大なる豫言である、宇宙と信者と聖靈とは

言難きの呻きを以て、萬物の完成、神の子の出現、天國の建設を豫言しつゝあるのである、而して此三大豫言ありて我等何をか疑はん、よし地は動き海は鳴り、山は海原の中に移るとも、我等いかでか恐れん、天地萬物と、我が靈魂と、神御自身とが我が信仰の證明者である、ハレルーヤ。

第四十一講 約説

救はれし理由

羅馬書八章廿八―卅節

○「また凡の事は神の旨に依りて召かれたる神を愛する者の爲に悉く動きて益をなすを我等は知れり」と云ふ(廿八節)、此の舊い日本譯に依るも、パウロの此言は實に著しい言である、信者を稱して「神の旨に依りて召かれたる神を愛する者」と云ふ、基督信者の定義として甚だ深い者である、信者は元來自から進んで神を信じてキリストの弟子と成つた者ではない、神に召かれた者である、聖召は

神を以て初つたのであつて、信者は只之に應じたまでである、而して聖召の恩恵に與りし結果として感恩の餘り神を愛せざるを得ざるに至つた者である、斯くて信者の信も愛も元々自分から出た者でない、神から出た者である、信者は徹頭徹尾神の恩恵の産である、而して斯かる者には萬事が悉く動きて益を爲すと云ふ、「萬事が」である、善き事のみならず惡しき事も、成功のみならず失敗も、名譽のみならず恥辱も、健康のみならず疾病も、利得のみならず損失も、萬事が悉く動きて害を爲さずして益を爲すと云ふ、實に驚くべき事柄である、世にそんな事があらう乎、そんな人があらう乎、「在ると我等は知る」とパウロは言ふのである、パウロの信仰が此事を彼に示し、彼の實驗が其示しを確めたのである。

○然し乍らパウロの言は日本譯に現はれたる以上に意味深長である、今之を左の如くに改譯する。

また我等は知る、神を愛する者にはすべてが善に向て共に働く、聖旨に循ひて召されたる者は、

と、信者は神を愛する者である、然し乍ら彼が神を愛するは神先づ彼を愛し給ひしに由る、彼は聖旨に循ひて選まれて召されたる者である、パウロは信者の神に對する愛を語る時に、之に優さる神の愛を陳べざるを得なかつた、以てパウロの信仰の性質を窺ふ事が出来る、「すべて」は何乎、萬事の外に萬物をも含まざる乎、又は「すべての困難」の意なる乎、すべての患難、悲痛、試誘を指して云ふ

とM・スチュアアトは言ふ。「共に働きて」である、舊い譯の「悉く働きて」ではない、萬事萬物は相關聯し、相共同し、一大機關となりて信者の益の爲に働くと云ふのである、恰も名將が諸軍を指揮して一の目的に向つて進むが如くである。而して其目的は「善」である、誰の善乎、信者の善乎、神の善乎、パウロは之を指名しない、唯「善に向つて」、又は善を目的に働くと云ふ、而して其善の何たる乎は次節に於て明かである、信者は神の愛の目的物なれども、彼は萬物の中心ではない、萬事萬物は信者の善を目的に働くと云ひて、信者を貴く見過るの誤謬に陥る、「萬物は汝等の屬なり」と言ひしパウロは更に附加して言ふた「汝等はキリストの屬、キリストは神の屬なり」と(コリント前書三章廿二―三節)、基督教は人間中心主義でもなければ信者中心主義でもない、神中心主義である。基督者には萬事萬物は善を目的に働く、必しも己が善の爲ではない、至上の善たる神の善き聖旨の成就を目的として働く、故に彼は悦ぶ、神の善、萬物の善が彼れ自身の善であるからである。

○「それ神は豫め知り給ひし所の者を其子の形に效せんとて豫め之を定め給へり、此は其子を多くの兄弟の中に嫡子たらしめんが爲なり」と(廿九節)、萬物の目的は茲にある、其子キリストを多くの兄弟の中にありて嫡子たらしめんが爲である、神が我等を召き給ひし第一の目的は我等を救はんが爲に非ずして其子キリストの崇められんが爲であつた、人間の社會に於ても最も善き家庭は子供本位の家庭である、三位の神の聖家庭に於ても其中心は聖子である、「萬物は彼(愛子キリスト)に由て造られたり、

且その造られたるは彼が爲なり、彼は萬物より先にあり、萬物は彼に由りて存つ事を得るなり」とある(コロサイ書一章十六、十七節)、而して信者も萬物の一部分であつて、彼が救はれしも亦キリストの爲である、彼が其兄弟即ち其聖き姿に效ひし者の中に在りて嫡子たらんが爲である、國王に國民が必要であるが如くに、聖國に王たるべきキリストにも亦救はれたる聖き民が必要である、かくて信者は自分の爲に生まれ、まねかれ、義とせられ、潔められ、終に榮光を着せられるのではない、王キリストの榮光に更に榮光を加へんが爲である、神の爲の救である、人間の爲の救でない。

○夫故に信者の救は確實なるものである、もし我等の爲の救ならば、我等は第一に之を信する事が出來ない、第二によし救はれたりとするも不安に堪へない、自分にさへ呆れる者が神が自分に就て呆れ給はずとの理由を發見する事が出來ない、然し乍ら神御自身の爲の救であると聞いて我等は安心して之に與る事が出来る、神が其子の救済の能力を顯はさんが爲に特別に罪人を選びて其救に與らしめ給へりと聞いて少しも不思議でない、又我等如き者の救はれんが爲に、萬物は外に在りて、聖靈は内に在りて呻き歎くと聞いて我等は驚かない、其聖子の善き臣下を造らんが爲に神が萬物をして互に相働きて我等の救を完成し給ふと聞いて少しも怪まない、自分の爲に施されたる恩恵は頼り難き恩恵である、然れども神御自身の爲に施されたる恩恵なるが故に、之を失ふの危険がないのである、基督者の安心の基礎は茲に在る、彼は己が救はれし理由を神の變らざる聖旨に於て見るからである、又よ然

り、如此きは聖旨に適へるなり」である。(マタイ傳十一章廿六節)。

第四十二講 約説

救の凱歌

羅馬書八章卅一節以下

○人の救はるゝは己に因らず神に因る、己の爲めに非ず神の爲である、故に救は確實である、又安全である、其順序は豫知、豫定、聖召、爲義、賜榮である、其目的は「其子を多の兄弟の中に嫡子たらしめんが爲め」である、「萬物は彼より出、彼に倚り、彼に歸る」とある、人の救はるゝは全然神中心である(十一章廿六節)。

○「然れば此等の事に就て何をか言はん、神もし我等の味方ならば誰か我等に敵せん乎」(卅一節)。

神御自身が施し給ひし救ひなれば何人も之を奪ふ事が出来ない、以下左の如くに解釋すべし。

己の子を惜まらずして(アブラハムが其子イサクを惜まざりしが如くに)我等すべて(信者全體)の爲に之を(死に)附せる者は、豈彼に併せて萬物(救ひに必要な萬物)をも我等に賜はざらん乎、神の選び給へる者を訟へん者は誰ぞ乎、義とする者は神なり、罪を定むる者は誰ぞ乎、死し者はキリストなり、然り、彼は復活りし者、神の右に在りて我等の爲めに執成し給ふ者なり、キリストの愛より我等を絶らせん者は誰ぞ乎、患難なる乎、憂苦なる乎、迫害なる乎、飢餓なる乎、裸裎なる乎、危険なる乎、刀劍なる乎、是れ「我等終日汝の爲めに死に附され、屠られんとする羊の如くせられたり」と録されしが如し(詩篇四十四篇廿二節)、然れども我等を愛し給ひし者に由り凡て此等の事に勝ち得て餘りあり、そは或は死或は生、或は天使或は執政、或は權能、或は現在或は未來、或は高き或は深き、また他の受造物は我等を我主イエスキリストに在る神の愛より絶らす事能はざるを我は信ぜしめらる(三十五節より三十九節まで)。

○「キリストに在る者は罪せらるる事なし」と云ひて始まりし第八章は「罪を定むる者は誰ぞや」との挑戰的質問を以て終つて居る、パウロが何よりも恐れた事は最後の神の裁判に於て罪に定められる事であつた、而して此事なきを保證せられて彼は凱歌を揚げざるを得なかつた、是れ彼が茲に十數回に涉り挑戰的質問を連發した理由である、彼は茲に長の間彼を苦しめし敵を追ひまくり乍ら、詰問の

矢を放ちつゝある、恰も源義家が安倍貞任を追ふの状である、「鐵の袖は綻びにけり」と云ひて追ひ掛くれば、「年を経し糸の亂れの苦しさに」と云ひて逃去る、パウロは茲に人の子を神に訟ふる者即ちサタンを追窮しつつあるのである。

○「執政」は希臘語のアルカイ、天使の一階級の名である(エペソ書所一章廿節參考)、「權能」と云ふも同じならん、天使と執政と權能と云ひて天使の三階級を指して言ひしならん、或は「天に在りては天使大天使、地に在りては執政者」との意なる乎も知れず、天上天下の勢力を總括しての謂ひならん。

○死の恐怖、生の誘惑。天上の勢力、地上の權威。既知の現在、未知の未來。天空の異象、地下の秘密。其他若し全然別種の世界ありとするも、是れ亦我等を我主イエスキリストに在る神の愛より云々。キリストに在る神の愛である、漠然たる神の愛でない、明白に指定せられたる神の愛である、義を以て現はれたる愛である、罰すべきを罰せずしては赦し給はざる神の愛である、故に貴き確實なる神の愛である、正義に由て現はれたる神の愛なるが故に、宇宙萬物何物も之を毀つ能はず、又我等を其愛より絶らす事能はずとパウロは言ふたのである、萬有は正義の上に立つ、萬有は壞れても正義は壞れない、而して正義の上に立つ救ひなれば萬有も之を翻へすこと能はずとパウロは言ふのである、「我主イエスキリストに在る神の愛」、彼を通して現はれたる愛、自身罪なき者なるに我等の罪となりて我等に代りて十字架の死を受け給ひし彼の愛、此愛より絶らす者、時間空間に在ることなしと云ふのである。

しと云ふのである。

○然らば「我が罪は如何」と問ふ者もあらう、天上天下、現在未來、我れ以外の何者も我をキリストに現れたる神の愛より絶らすること能はずと云ふも、我れ自身の罪は我が授かりし救ひより我を絶らすの危険なき乎、「在り」と或る神學者は言ふ、然れども若し然りとすれば我が救ひは最も不安である、頼り難き者にして我心の如きはない、「心は萬物よりも偽はる者にして甚だ悪し」とある(エレミヤ記十七章九節)、もし我が救ひが我が決心、我が努力、我が擔たざる注意に由る者ならば我は尙ほ危険に於て在る、天使よりも大天使よりも死の苦痛と生の誘惑よりも危険なる者は我心である、之が守られずして、其安全が保證せられずして、我は依然として危険に居るのである。

○まことに安心はならないと言へば言ひ得る、「汝等常に畏懼戰慄て己が救を全うせよ」とパウロは言ふた、然れども斯く言ひて後直に彼は言ふて居る「その善き聖旨を行はんとて汝等の衷に働きて、汝等をして志を立て事を行はしむれば也」と(ピリピ書二章十二、十三節)、神は我が衷に働きて我が救を完成し給ふ、「汝等の心の中に善き工を始め給ひし者は之を主イエスキリストの日までに全うすべし」とパウロは同じピリピ書に於て言ふて居る(一章六節)、我れ求めざるに我を求め給ひし者、我を知り、定め、召し、義とし、潔め給ひし者が、最後の瀬戸際に於て我を見放し給ふであらう乎。

His mercies in past forbids me to think,

10304

羅馬書講義約説

That He will at last, allow me to sink.

過去に於て現はれたる彼の恩恵は余をして思ふ事を禁ぜしむ。

彼は終に我をして滅亡の淵に沈めしめ給ふとは。

三二八

羅馬書の研究(中)

昭和二十三年十月十日 初版印刷
昭和二十三年十月二十日 初版發行

定價 一五〇圓

著者 内村 鑑三

發行者 矢部 良策

印刷者 原田 憲次郎



發行所 東京都中央区日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北区藤上町四五)

株式會社 創元社
電話穿場町(輔)二四〇六
會員番號 A 一一九〇八三四一

大洋印刷・山田製本

終

